

平成20年度（第52回）
岩手県教育研究発表会発表資料

キャリア教育

高等学校における系統的なキャリア教育を 実践するための指導プランの作成に関する研究

- 総合的な学習の時間と特別活動を中心として -

平成21年1月6日
岩手県立総合教育センター
長期研修生（1年）
所属校 岩手県立盛岡商業高等学校
三 河 光 博

目次

研究目的	1
研究の方向性	1
研究の内容と方法	1
1 内容と方法	1
2 授業実践の対象	1
研究結果の分析と考察	1
1 高等学校における系統的なキャリア教育を実践するための指導プランの作成に関する 基本構想	1
(1) 高等学校におけるキャリア教育を実践するための基本的な考え方	1
(2) 総合的な学習の時間と特別活動を中心とする意義	4
(3) 指導プランの定義	4
(4) 総合的な学習の時間と特別活動を中心としたキャリア教育の指導プランを 系統的に行う意義	4
(5) 総合的な学習の時間と特別活動を中心としたキャリア教育の指導プランの作成に かかわる考え方	6
(6) 高等学校における系統的なキャリア教育を実践する指導プランの作成に関する 基本構想図	8
2 基本構想に基づく手だての推進試案	8
(1) 計画段階	9
(2) 実践段階	11
3 授業実践及び実践結果の分析と考察	13
(1) 分析・考察の内容と方法	13
(2) 高等学校における系統的なキャリア教育を実践するための指導プラン実践の概要	14
(3) 実践結果の分析と考察	17
4 高等学校における系統的なキャリア教育を実践するための指導プランの作成に関する 研究のまとめ	20
(1) 成果	20
(2) 課題	20
研究のまとめと今後の課題	21
1 研究のまとめ	21
2 今後の課題	21
[おわりに]	
【引用文献】	
【参考文献】	

研究目的

キャリア教育では、「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」などを中心とした身に付けるべき能力の育成をとおして、「勤労観」「職業観」を伸ばすことが求められている。高等学校においては、現実的探索と試行並びに社会的移行準備の時期であり、その発達段階に応じた「勤労観」「職業観」を伸ばす教育が大切であるとされている。

しかし、高等学校では、進学・就職指導のみを目的とした指導に終始しているのが現状である。そのため、身に付けるべき能力の育成がなおざりになり、就労体験（インターンシップ）、進路講演会、1日体験入学などの活動が単発的になってしまい、キャリア教育本来のねらいに沿った活動になっていないのが実情である。実際、「勤労観」「職業観」が未成熟であり、社会人・職業人としての基礎的・基本的な資質・能力が低下していることも産業界を始め、進学先や就職先からも指摘されている。本県においても、3年以内で離職する生徒が、ここ数年50%を超え、進学先でも退学・進路変更を希望する学生が増加傾向にある。その要因として、教師が、キャリア教育のねらいや指導の在り方を明確にとらえておらず、キャリア教育を推進するための中核となるはずの特別活動と総合的な学習の時間において系統的な指導がなされていないと考えられる。

このような状況を改善するためには、キャリア教育の位置付けを明確にし、総合的な学習の時間や特別活動を中心としたキャリア教育指導プランを作成することが必要である。また、教師だけでなく生徒個々が自己の発達を確認できるワークシートを作成し、活用させることにより、身に付けた知識や技術等を相互に関連付け、学習や生活にいかせると考える。さらに、評価方法を指導プランに明示することで、実践過程において教師間で評価を行い、生徒に対してどのような効果や反応、課題等があったかを確認することが容易となり、次の指導に役立てることができる。

そこで本研究は、系統的なキャリア教育を実践するための指導プランの作成をとおして、「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」などを中心とした諸能力の育成方法を明らかにし、「勤労観」「職業観」を伸ばす指導に役立てようとするものである。

研究の方向性

高等学校キャリア教育において「勤労観」「職業観」を伸ばすため、総合的な学習の時間と特別活動を中心に、身に付ける能力の育成を軸とした系統的なキャリア教育指導プランを作成し、提示する。

研究の内容と方法

1 内容と方法

- (1) 高等学校における系統的なキャリア教育を実践するための指導プランの作成に関する基本構想の立案（文献法）
- (2) キャリア教育の発達に基づく指導プラン・ワークシートの作成（文献法）
- (3) 授業実践及び実践結果の分析と考察（授業実践、質問紙法）
- (4) 高等学校における系統的なキャリア教育を実践するための指導プランの作成に関する研究のまとめ

2 授業実践の対象

岩手県立盛岡商業高等学校 第2学年

研究結果の分析と考察

1 高等学校における系統的なキャリア教育を実践するための指導プランの作成に関する基本構想

- (1) 高等学校におけるキャリア教育を実践するための基本的な考え方

ア キャリア教育の定義

国立教育政策研究所生徒指導研究センター（以下、生徒指導研究センターと記す）は、「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」（2004）（以下、キャリア教育報告書と記す）において、「キャリア」という言葉を「個々人が生涯にわたって遂行する様々な役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」と示している。

また、「キャリア教育」を「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度を育てる教育」としている。

すなわち、キャリア教育は、児童生徒一人一人の勤労観・職業観を育てる教育であるととらえる。

イ キャリア教育の必要性

生徒指導研究センターによれば、若者のフリーター志向の拡大、無業者の増加、早期離職問題など、学校から職業への移行にかかる課題は深刻なものとなっている。その要因として、就職・就業をめぐる社会環境が激変したこと、児童生徒の働くことへの目的意識・責任感、関心・意欲・態度等といった勤労観・職業観が希薄になっていること、円滑な人間関係を構築できない、基本的マナーが確立されていないこと等、社会人・職業人としての基礎的・基本的な資質・能力が低下していることを挙げている。

また、少子化や大学増設等による進学率の上昇により、進路意識や目的意識が希薄なまま「とりあえず」進学したり、卒業後の進路や職業について考え、選択・決定することを先送りにしたりする傾向にある等を指摘している。

以上のような現状を踏まえ、キャリア教育では、個人として力強く生きていくために、基盤となる意欲や態度及び勤労観・職業観を伸ばすこと、社会人・職業人として、自立できるようにするためにキャリア教育のねらいに沿った指導が必要である（キャリア教育報告書）。

ウ 勤労観・職業観を育成するための諸能力とその定義

生徒指導研究センター（2002）は、「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進に関する調査研究報告書」（以下、調査研究報告書と記す）の中で、「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」を示している。

この中で、学校段階別にみた職業的（進路）発達段階にかかわる諸能力を、「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」等を中心とした身に付けるべき四つの領域と八つの能力に分類している（【表1】）。

【表1】職業的（進路）発達段階にかかわる諸能力 - 高等学校のみ抜粋 -

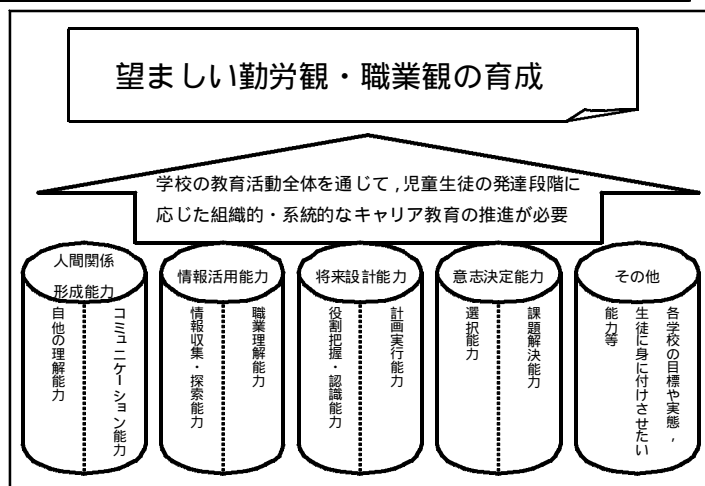
四つの領域	説明	八つの能力	説明
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む。	自他の理解能力	自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力
		コミュニケーション能力	多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力
情報活用能力	学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かす。	情報収集・探索能力	進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに、必要な情報を選択・活用し、自己の進路や生き方を考えていく能力
		職業理解能力	様々な体験等を通して、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や、今しなければならぬことなどを理解していく能力
将来設計能力	夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。	役割把握・認識能力	生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力
		計画実行能力	目標とすべき将来の生き方や進路を考え、それを実現するための進路計画を立て、実際の選択行動等で実行

			していく能力
意思決定能力	自らの意志と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。	選択能力	様々な選択肢について比較検討したり、葛藤を克服したりして、主体的に判断し、自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力
		課題解決能力	意志決定に伴う責任を受け入れ、選択結果に適応するとともに、希望する進路の実現に向け、自ら課題を設定してその解決に取り組む能力

その後、キャリア教育報告書を発表し、その中で校種別の詳細な学習プログラムの枠組み（例）を公示した。

しかし、キャリア教育の先進校の実践例と学習プログラムの枠組み（例）を比較してみると、四つの領域と八つの能力を踏まえながら各校の現状にあわせて取り組んでいる学校もある。

梶（2004）は、児童生徒の自己分析・自己理解によって内的な深化、自己表現を成長させる観点から、「自己教育能力」を設定し、五つの領域と10の能力で取り組む学習プログラムを作成している。しかし、基本となっているのは生徒指導研究センターから示された学習プログラムの枠組み（例）ととらえることができる。



【図1】勤労観・職業観を育成するための諸能力
 む学習プログラムを作成している。しかし、基本となっているのは生徒指導研究センターから示された学習プログラムの枠組み（例）ととらえることができる。

したがって、勤労観・職業観を育成するためには、【図1】及び2頁の【表1】のような四つの領域能力と八つの能力を実践する土台としつつ、各学校の目標や実態、生徒に身に付けさせたい能力を分析した上で、他の育成する能力を設定することが望ましい。

例えば、ボランティア活動を重点的に行っている学校では、「社会活動参画能力」や、ディベート活動を取り入れている学校であれば、「自己開示・表現能力」といった領域を設定することも可能である。

本研究においては、高等学校でキャリア教育を推進するため、調査研究報告書から示された四つの領域を中心に、それぞれの諸能力を伸ばすことで、勤労観・職業観を育成できるととらえる。

エ 高等学校におけるキャリア教育の意義

イで述べたように、生徒を取り巻く社会環境は目まぐるしく変化している。とりわけ、高等学校は、卒業時の進路が多岐にわたり、生徒自身もどのように自分の将来を考えて行けばよいか模索する段階である。

キャリア教育報告書では、若者の勤労観・職業観や職業人としての基礎的資質・能力の低下を指摘している。厚生労働省（2007）が発表した「高等学校新規学校卒業者の就職離職状況調査結果」では、1999年より3年以内の離職率が50%近い数値にある。本県においては、3年以内の離職率が1999年より50%前後を推移している状況にある。

その要因としては、企業側と求職者側の雇用のミスマッチが起きている、労働条件が良くない、人間関係を円滑に構築できない等、が挙げられる。早期離職した生徒達の中には再就職し、新しい職場で自分のキャリアに磨きをかける者もいるが、そのまま「ニート」「フリーター」になってしまう者も少なくない。

高校生が進学を希望する理由として、「専門的な知識・技術を身に付けたい」「希望する職種に就くために必要な資格を得たい」等と目標をもって進学する生徒がいる反面、「まだ働きたくないから」「進学が当然だと思っている」「みんなが進学するから」という安易な理由で「入れる学校」

を決める生徒も少なくない。

大学入学後の状況を内田（2007）は、「入学後，他の大学や専門学校を受験しなおす」学生がここ10年間で三倍以上に，無気力傾向の学生が二倍近くに増加し，高等学校段階での進路指導が重要であることを指摘している。

このような実態を踏まえ，高等学校では，身に付けるべき能力を育成しつつ，個々の勤労観・職業観を伸ばすためにキャリア教育を実践する意義があると思われる。

(2) 総合的な学習の時間と特別活動を中心とする意義

キャリア教育を学校教育全体で行うために文部科学省（2006）は、「キャリア教育推進の手引き」（以下，手引きと記す）の中で，総合的な学習の時間や特別活動は，各教科で学んだ成果を様々な活動をとおして，深化・発展，統合させたり，その成果を教科の学習に反映させたりしていくというねらいをもっている。そこで展開される職業や進路に関連する学習活動は，キャリア教育を進める上で，直接的かつ中核的な取り組みとして最も重要な役割を担うものであり，その計画等を改善，充実することとしている。

しかし，キャリア教育を実践する上で教師側にも様々な問題が挙げられている。

渡辺（2007）は，「進路指導とどこが違うのか」「また新しいことをしなくてはならないのか」「職場体験をさせればいい」といった教師側の認識に問題があると指摘している。

また，教員のキャリア教育に対する意識調査（愛知県総合教育センター，2007）では，「提唱されている内容が分かりにくい」「教員が果たすべき役割が分からない」といったキャリア教育の位置付けが明確になっていない問題を挙げている。

以上のことから，キャリア教育を学校教育全体で行うためには，キャリア教育の位置付けを明らかにし，総合的な学習の時間や特別活動を中心として各教科や部活動等との連携を図りながら行うことに意義があると考えられる。

そこで，本研究は，高等学校におけるキャリア教育の位置付けを明確にし，キャリア教育における総合的な学習の時間と特別活動を中心とした指導プランを作成するものである。

(3) 指導プランの定義

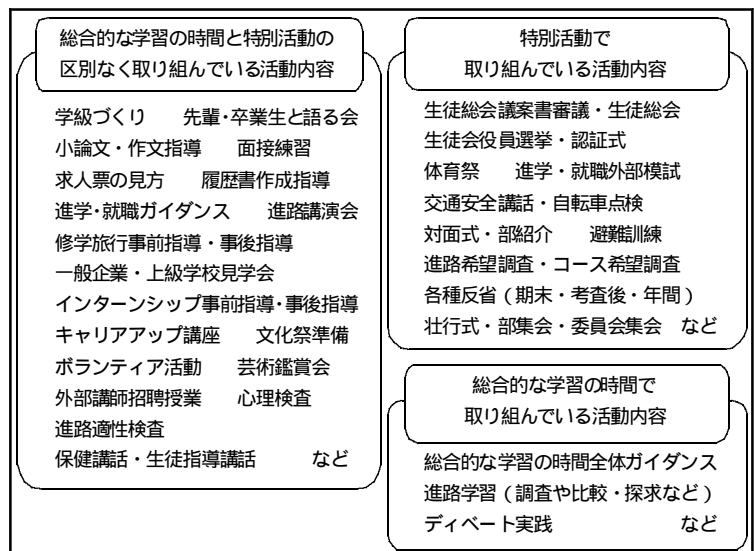
指導プランとは，高等学校における総合的な学習の時間と特別活動を中心とした系統的なキャリア教育を実践するための活動計画である。

(4) 総合的な学習の時間と特別活動を中心としたキャリア教育の指導プランを系統的に行う意義

ア 総合的な学習の時間と特別活動を中心としたキャリア教育の指導プランを取り入れる意義

これまで高等学校が取り組んできた活動内容を山崎（2006）は，総合的な学習の時間や特別活動の取り組みは，広く進路指導の一環としてとらえられることが多く，本人の適性と職業の特性との合致点を見つけることに力を注ぐ指導であると指摘している。

また，川崎（2007）も入学段階からキャリア教育のねらいに沿った取り組みを行っていたが，三年生になるとキャリア教育と切り離し，従来の進路指導に転換する場合が多い，とキャリア教育の持続



【図2】各学校で取り組んでいる主な活動内容

性の欠如について指摘している。

各学校の現状をみると、特別活動は年間計画に沿って実施するものの、計画どおり実施できず、担任裁量で実施される時間数も多々ある。総合的な学習の時間においては、各学年の特色をいかし、年間計画を作成するが、キャリア教育のねらいに沿った指導を行っているとは言い難い。

しかし、実際に行われている総合的な学習の時間や特別活動の活動内容をみれば(4頁【図2】)、キャリア教育のねらいに沿った活動が多数ある。これらの活動内容を、キャリア教育の視点で系統的につなぐことにより、生徒に対し、学んだ知識や技術が風化しないうちに事後指導ができると考える。

以上のことから、キャリア教育を実践するためには、指導プランを取り入れることに意義があると思われる。

イ 系統的なキャリア教育の定義

手引きでは、諸能力の育成に関連する諸活動を体系化し、計画的・組織的に実施することと示している。

また、調査研究報告書においては、キャリア教育のねらいを意識しながら指導することにより、活動のねらいや目的が明確になり、取り組みへの創意・工夫が生まれ、系統的なキャリア教育が行えるとしている。

系統的なキャリア教育を行うため、これまで行っている活動内容を学校の現状に照らしあわせ、キャリア教育のねらいに沿って分類を行った。また、それぞれの段階を踏んでキャリア教育の活動を行うことにより、系統的な指導が可能となると考える。

したがって、本研究においては、学年に応じて次のような五つの段階に分け、そこで身に付いた諸能力を次の段階で更に伸ばすことによって、系統的なキャリア教育に取り組めるととらえる。

(ア) 第一学年

第一段階：自己・他者を理解する(人間関係形成能力の育成に重点を置く)

第二段階：職業を理解する(視野を広げさせる活動に重点を置く)

第三段階：職業を体験する(第二段階で新たに気付いた職業を体験することにより、職業観を広げさせる活動に重点を置く)

第四段階：将来を設計する(前向きに自己の将来を設計する活動に重点を置く)

第五段階：進路目標の仮設定(将来の具体的な目標を定めることに重点を置く)

(イ) 第二学年

第一段階：自己を再認識する(客観的に自分を見つめ直し、自己の個性を發揮しながら、様々な人々とコミュニケーションの育成に重点を置く)

第二段階：職業を理解する(将来就きたい職業を、より深く探求することで個々の視野を広げさせる活動に重点を置く)

第三段階：職業・上級学校を体験する(自己の描いている将来像を体験することにより、勤労観・勤労観を養う活動に重点を置く)

第四段階：将来を再設計する(社会の現実を踏まえ、将来設計を見直す活動に重点を置く)

第五段階：進路を再検討する(自己の能力に応じて、将来の具体的な目標を定めることに重点を置く)

(ウ) 第三学年

第一段階：自己実現をする(リーダーシップを發揮し、自己有用感等の育成に重点を置く)

第二段階：進路目標の設定(これまで養われた勤労観・職業観を基に、自己の進路目標をより鮮明に設定する活動に重点を置く)

第三段階：進路実現への取組(個々が掲げた目標に向け、将来設計を実行できる能力を育む活

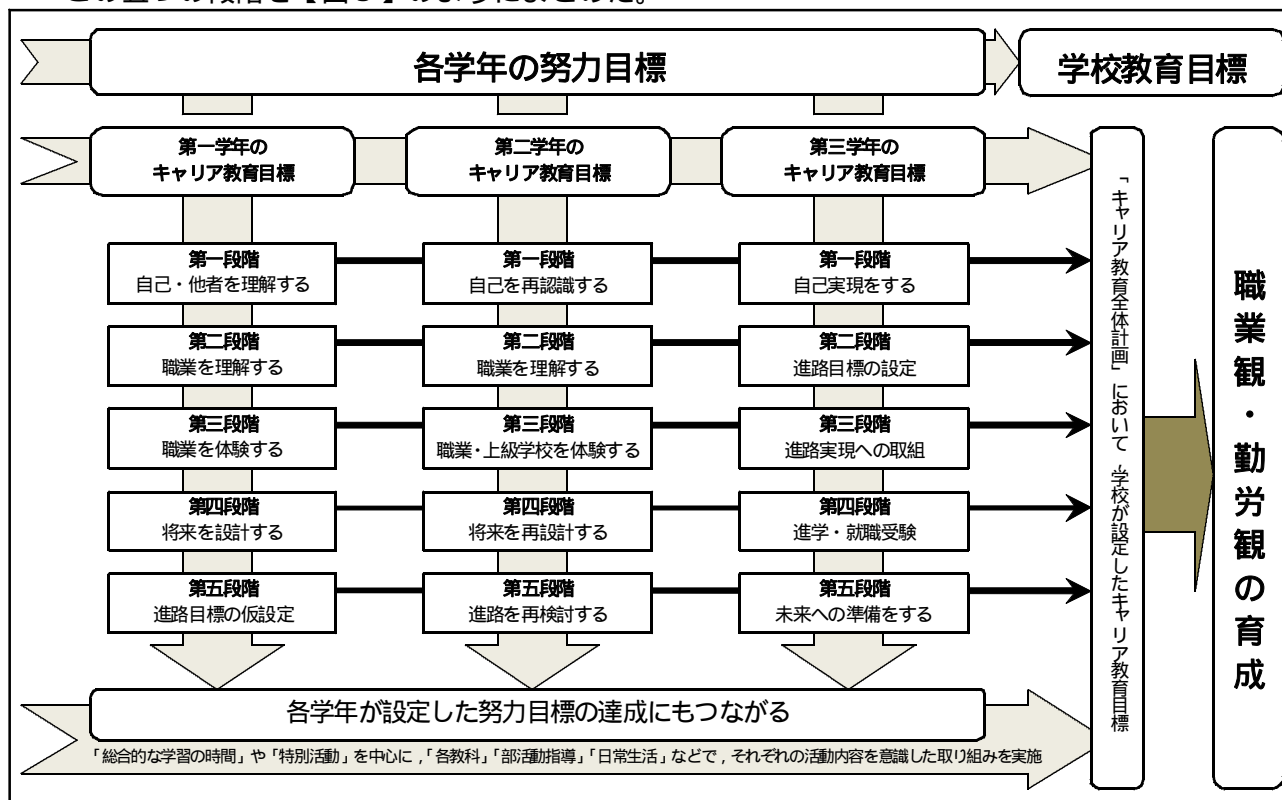
動に重点を置く)

第四段階：進学・就職受験（個々の進路に応じ、これまで養われた諸能力を振り返りながら、進路実現達成のための活動に重点を置く）

第五段階：未来への準備をする（進路決定後の不安感等を取り除き、期待感をもたせる活動を重点的に行う）

系統的なキャリア教育は、それぞれの段階を踏んで活動することにより、よりねらいが明確になり、伸ばしたい諸能力を身に付けさせて活動することができるのとらえる。

この五つの段階を【図3】のようにまとめた。



【図3】系統的なキャリア教育を五つの段階に分けたイメージ図

さらには、総合的な学習の時間と特別活動において、キャリア教育のねらいに沿って取り組める活動を関連付けて指導することにより、以下のことが可能になる。

教師間で活動内容の共通理解が図られ、様々な活動において意図的にキャリア教育のねらいを意識させることができる

他教科や日常生活での指導、部活動や委員会活動でも、キャリア教育のねらいに沿った指導が行える

- (5) 総合的な学習の時間と特別活動を中心としたキャリア教育の指導プラン作成にかかわる考え方
総合的な学習の時間と特別活動を中心としたキャリア教育の指導プランは、大きく分けて三つの内容で作成する。

- ア 諸能力育成の視点を入れた系統的な活動計画
- イ 必要に応じた学習内容を記録するワークシートの活用方法
- ウ 実践過程での評価や活動計画の見直しの方法

である。

ア 諸能力育成の視点を入れた系統的な活動計画について

- (ア) キャリア教育全体計画の作成

キャリア教育を推進するためには、キャリア教育全体計画を作成する必要がある。それぞ

れの学校の実態を押さえ、生徒に身に付けさせたい諸能力などを明確にし、キャリア教育を推進していく必要がある。本研究では、前川（2006）が作成したキャリア教育全体計画を基に、提示する。

(イ) キャリア教育のねらいに沿った活動内容の整理

これまでの総合的な学習の時間と特別活動で取り組んでいる活動内容を、キャリア教育のねらいに沿った内容であるか、整理をする必要がある。その後、総合的な学習の時間と特別活動で系統的に活動できる内容を確認し、実施時間を確保する。

活動内容毎に「キャリア教育のねらい」や「育成する諸能力」等を認識することで、キャリア教育のねらいに沿った活動が可能となる。

(ウ) 職員間の共通理解を図る

それぞれの活動内容をキャリア教育の勤労観・職業観を育成するための諸能力に照らしあわせてみると、各教科や部活動指導等でも連動させて指導できる活動内容もある。手引きにおいては、キャリア教育を推進するには、職員間で共通理解を図り、全職員で取り組むべきと示されている。

そのためには、キャリア教育を推進するための組織作りをし、位置付けや活動内容について、随時職員に伝える必要がある。

例えば、職員会議の議題で取り上げたり、一つの活動が終了した段階で全職員に対してどのような内容が行われたのか、各教科や部活動指導等でも指導できるポイント等をプリント化し、配布したりすることによって、職員間の共通理解が図れる。

イ 必要に応じた学習内容を記録するワークシートの活用方法について

ここでいうワークシートは、生徒に様々な体験や学習内容、感想や気づきを記入させることにより、新たな発見、興味・関心を気付かせるシートを指す。ワークシートをポートフォリオすることにより、生徒が振り返りや自己の変容に気付くことができる。

また、進級時のクラス替えで担任が変わった場合でも、ポートフォリオがされていれば、生徒の勤労観・職業観を始め、意識の変容過程等を引き継ぐことができる。

宮下（2006）も、ワークシートや資料のポートフォリオが、生徒の変化や教師の取り組みの評価にきわめて有効な情報として活用できると指摘している。

このワークシートを有効活用するために、担任もしくは指導者に対して、該当する活動の指導ポイント等の留意点を記載したマニュアルを作成する。

ウ 実践過程での評価と活動計画の見直しの方法について

ワークシートで生徒が記入した内容は、教師の取り組みの評価にも活用できる。また、キャリア教育実施後の評価について、宮下（2006）は、計画した活動が効果を上げつつあるかどうか、予想しなかった問題や課題が起きていないかどうか、場合によっては活動内容の修正が必要かどうかを確認する「実践過程での評価」を行うことと、活動計画の修正が必要かどうか、目標が達成されたか、を確認する「活動計画の見直し」を行うことが大切であると指摘している。

本研究においては、それぞれの活動内容がキャリア教育のねらいに到達しているか確認することを「実践過程での評価」ととらえる。「実践過程での評価」は活動内容を振り返り、生徒に対して効果はどうか、生徒の反応はどうか、実践上の課題があったか等を判断することである。

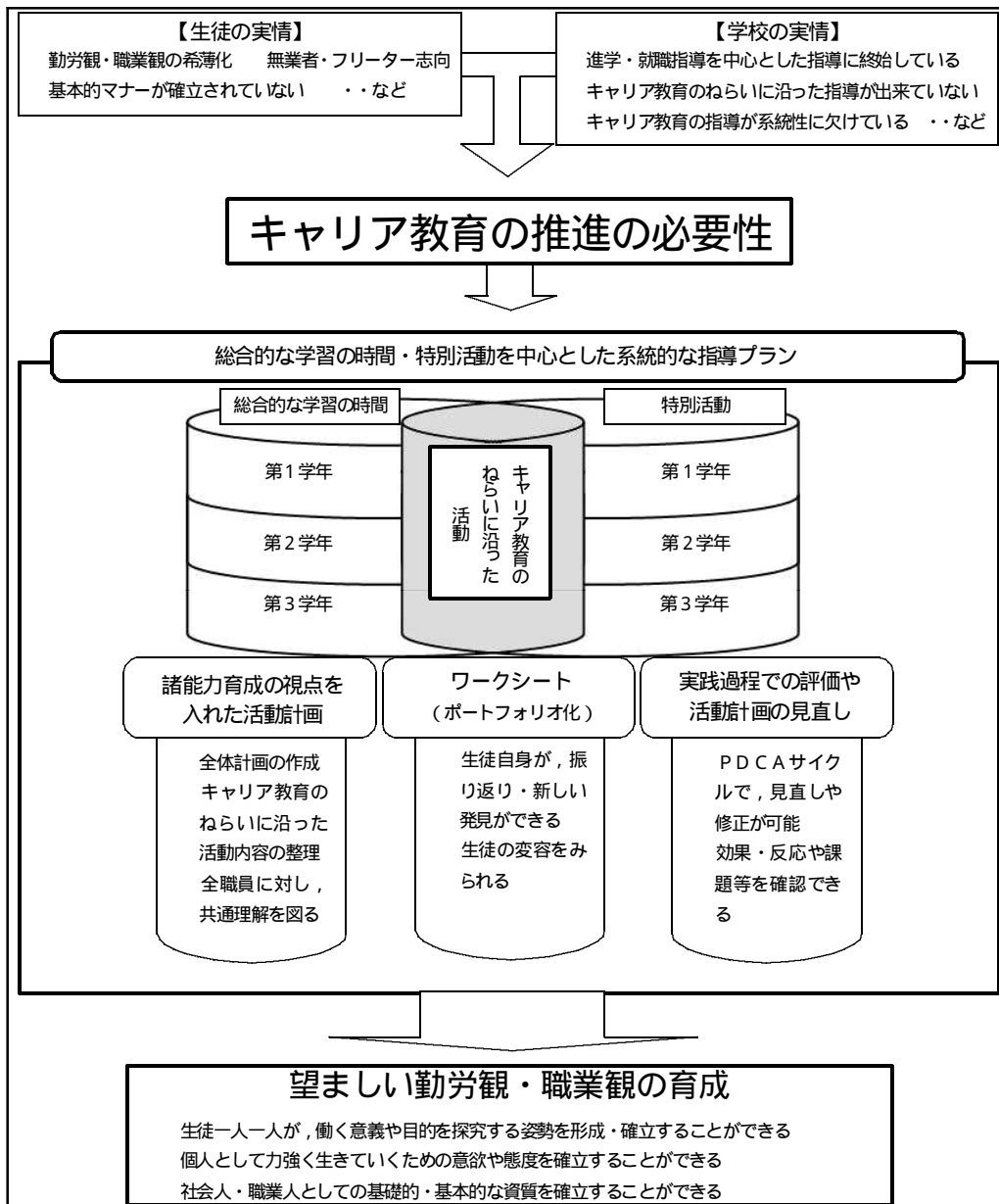
また、学期単位や年間の活動が終了した段階で、学年もしくは全体のキャリア教育のねらいに到達しているかを確認することを「活動計画の見直し」ととらえる。「活動計画の見直し」は学年毎に設定したキャリア教育の目標に到達したか、計画が生徒に対し、有効なものであったか、改善すべき点はどこなのかを判断することである。

生徒の現状にあわせて、修正・改善を行うことにより、PDCAサイクルができ、学校独自のキャリア教育を進めることができる。

これまで、キャリア教育にかかわる様々な取り組みが単発的になりがちであったが、実践過程での評価と活動計画の見直しを取り入れることにより、教師側が何をすべきか、どのように取り組ませるべきかが一層明確になる。

(6) 高等学校における系統的なキャリア教育を実践する指導プランの作成に関する基本構想図

これまで述べてきたことを基に、高等学校における系統的なキャリア教育を実践するための指導プランの作成に関する基本構想図を【図4】のようにまとめた。



【図4】高等学校における系統的なキャリア教育を実践する指導プランの作成に関する基本構想図

2 基本構想に基づく手だての推進試案

総合的な学習の時間と特別活動を中心とした系統的な指導プランの作成にかかわる手順を9頁の【図5】のように示す。

計画段階では、各学校の目標や生徒の実態を踏まえた全体計画を作成し、総合的な学習の時間と特別活動の活動内容と、キャリア教育のねらいに沿った活動内容の整理を行う。その上で、職員間の共通理解を図る。実践段階では、諸能力育成の視点を入れた活動計画やワークシートを作成する。また、実践過程での評価や活動計画の見直しの方法を考える。

以下、各段階における具体的な手順について述べる。

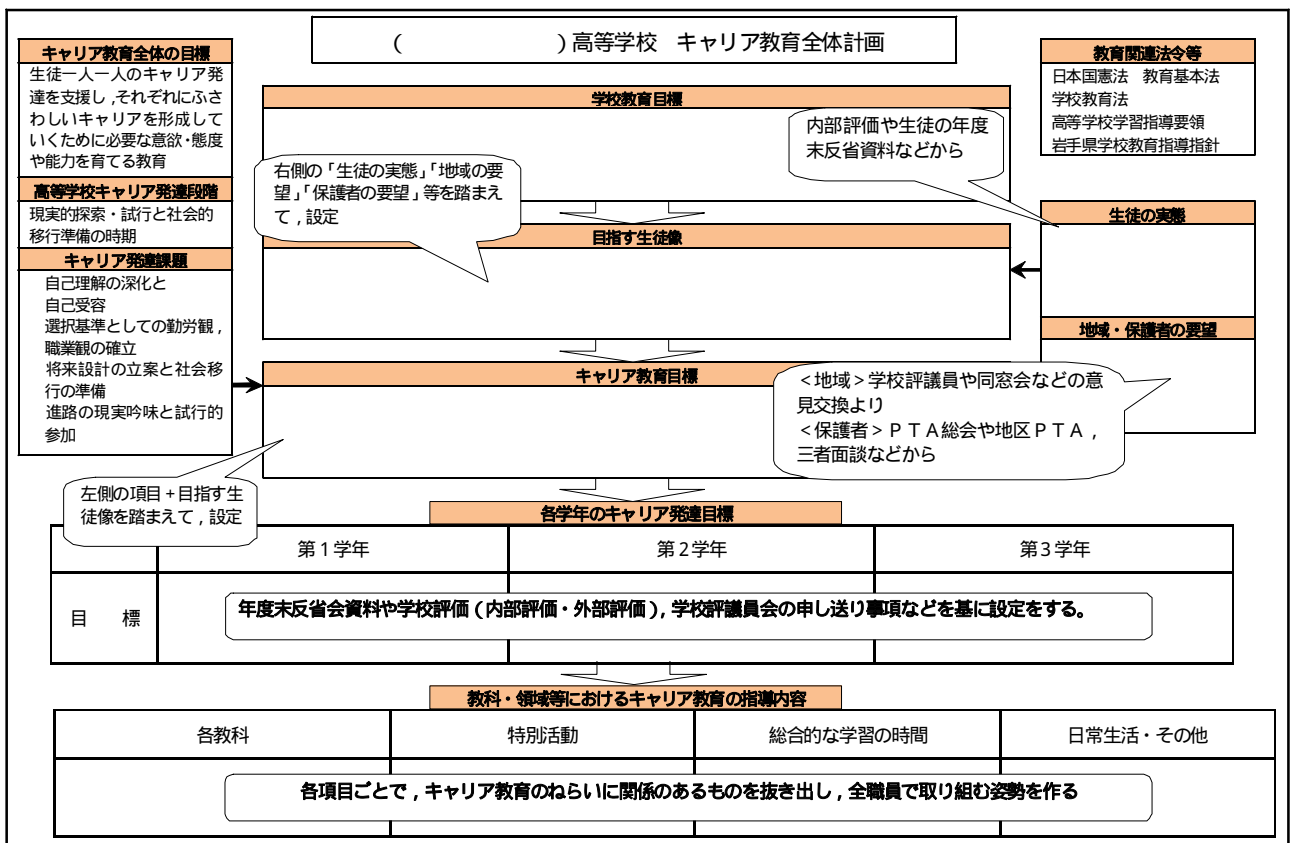
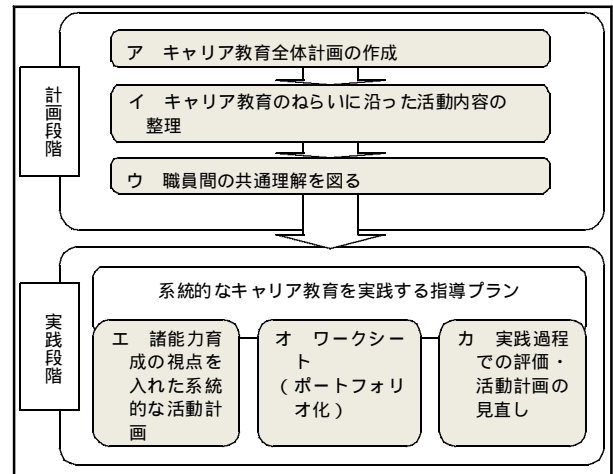
(1) 計画段階

ア キャリア教育全体計画の作成について

キャリア教育の位置付けを明確にし、組織的・系統的に展開させるために、キャリア教育全体計画を作成する。

これはキャリア教育を、学校のどの場で、どのように実施するか、学校教育での位置付けを示したものであり、学校の基本的な考えを示したものである。

キャリア教育全体計画（【図6】）に記載する内容は、学校教育目標、目指す生徒像、地域や保護者の要望、学年の発達段階に応じた【図5】系統的な指導プランを作成するまでの手順目標、教科・領域等での指導内容等とする。



【図6】キャリア教育全体計画

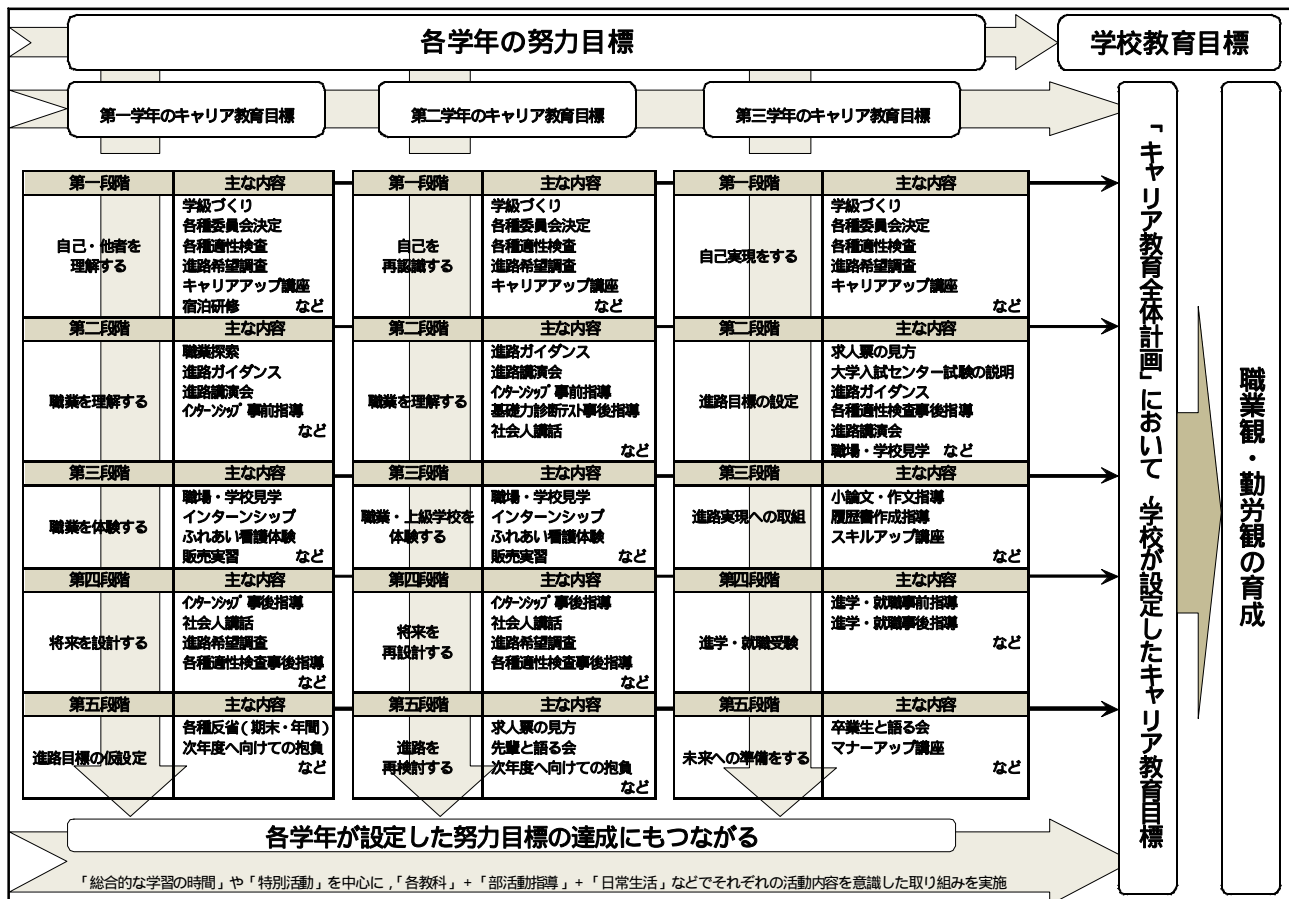
イ キャリア教育のねらいに沿った系統的な活動内容の整理について

キャリア教育で育成する能力・態度は、各学年の発達段階に応じて、生徒指導研究センターから示された枠組み（例）及び学校の目標や実態、生徒に身に付けさせたい能力を分析した上で設定する。

また、年度末の反省会資料や学校評議会、学校評価等を活用することにより、具体的な能力・態度の設定ができる。キャリア教育を推進する上で、中心的な活動になる総合的な学習の時間と特別活動の活動内容を整理することにより、キャリア教育のねらいに沿った活動内容が明らかになる。

整理の方法は、これまで取り組んできた活動内容が、キャリア教育のねらいに沿った活動内容か、系統性がある活動内容か、等で整理し、活動計画を作成する際の参考として活用する。

これまで行っている学校行事や総合的な学習の時間・特別活動の活動内容を、キャリア教育のねらいに沿った系統性のある活動内容として整理すると、【図7】のようになる。



【図7】キャリア教育のねらいに沿った活動内容の整理(例)

ウ 職員間の共通理解について

キャリア教育を推進する上でポイントとなるのが、職員間の共通理解である。これは、キャリア教育の位置付けを明確にさせるためにも、大切な部分である。

年度初めの職員会議等で、キャリア教育の活動計画を全職員に示し、共通理解を図る。

さらには、実践過程での評価を定例職員会議において報告、検討・改善することで、翌月以降の活動にもいかせると考える。

職員会議を活用したキャリア教育の位置付けを明確にさせる方法を、【表2】に示す。

また、それぞれの活動が終了した段階で、全職員に対し、どのような内容で行われたのか、各教科や日常生活の指導において、どのような視点でキャリア教育を行えばよいのか等、を簡単にまとめたプリント(【11頁図8】)を作成・配布することにより、教師も

【表2】職員会議を活用した職員間の共通理解を図る方法

2～3月	来年度の計画立案
4月	年度初職員会議で計画案の提示・説明 定例職員会議にて進捗状況・翌月の活動内容詳細提示
5～7月	定例職員会議にて進捗状況・翌月の活動内容詳細提示 ・改善すべき点の報告
夏季休業	中間のまとめ・活動終了時の評価
8月	定例職員会議にて進捗状況・翌月の活動内容詳細提示 ・改善すべき点の報告 中間のまとめ・活動終了時の評価の報告
9～12月	定例職員会議にて進捗状況・翌月の活動内容詳細提示 ・改善すべき点の報告
冬季休業	中間のまとめ・活動終了時の評価
1月	定例職員会議にて進捗状況・翌月の活動内容詳細提示 ・改善すべき点の報告 中間のまとめ・活動終了時の評価の報告
2月	定例職員会議にて進捗状況・翌月の活動内容詳細提示 ・改善すべき点の報告 来年度の計画立案
3月	定例職員会議にて進捗状況・改善すべき点の報告 全職員を対象に評価を行う 年間のまとめ・キャリア教育全体にかかわる評価 来年度の計画立案

様々な生徒とのかかわりの中でキャリア教育の諸能力育成を意識しながら、指導に取り組めるものとする。

(2) 実践段階

ア 諸能力の視点を入れた系統的な活動計画の作成について

キャリア教育のねらいに沿って整理された活動内容を基に、活動計画【図9】を作成する。

一つ一つの活動をとおして育成する能力とその重点を明記することにより、担任もしくは指導者が意識して活動に取り組むことができる。

また、振り返りの活動を明記することで、担任もしくは指導者も以前の活動を振り返りながら、生徒に支援ができ、系統的な指導が可能となる。

指導内容には、その活動で行う流れやワークシートの活用方法、指導上の留意点を具体的に盛り込んでいくことにより、初めてキャリア教育に携わる教師にも、ポイントを押さえて取り組むことが可能となる。

イ ワークシートについて

ワークシート(12頁【図10】)は、生徒がキャリア教育の活動に対して、気付きや振り返りを行うためのものである。

ワークシートとともに、教師側に対し、指導のポイントや留意点も記載したマニュアル(12頁【図11】)を活用することで、キャリア教育のねらいをとらえ、より意識した指導が可能となる。

マニュアルには、この時間を活用して育成したいキャリアの能力、キャリア教育に沿った指導のねらい、指導の工夫や留意点、ワークシートの活用方法例、実践活動後の評価内容や生徒が使用するワークシートの記入例等、を明記する。

また、ポートフォリオができ、継続して活用できる内容のワークシートを作成する。

生徒側は、次の活動で前時に行った内容を振り返りながら、活用することが可能になる。自己の気持ちや考えを前年や数ヶ月前と比較したり、調べ学習をした内容などを振り返ることによって、新しい発見や興味・関心を膨らませたりすることができる。

教師側は、実践過程での評価や活動計画の見直しの材料とすることができる。

また、クラス替え等により担任が変わっても、ポートフォリオがされていれば、引き継いだ生徒の変容や進路に対する考え方等も理解が可能になり、三者面談や進路相談を行う際にも活

キャリア教育推進だより
(活動が終わった段階で作成・配布)

<進路講演会の内容紹介>

講師： 氏
勤務先：株式会社
この業界のママ知識：

講演会の内容(抜粋)
この業界の動向について
弊社の売上状況と雇用形態
求職者のポイント

各教科や部活動指導等、日常生活から指導できる内容を具体的に記載する

講師から学ぶ! 授業活動からできるキャリア教育
(授業の導入などで活用してください)

あいさつはしっかりと覚えて欲しい
.....
授業の最初と最後はしっかりと指導を!
国語科でも取り上げて欲しい

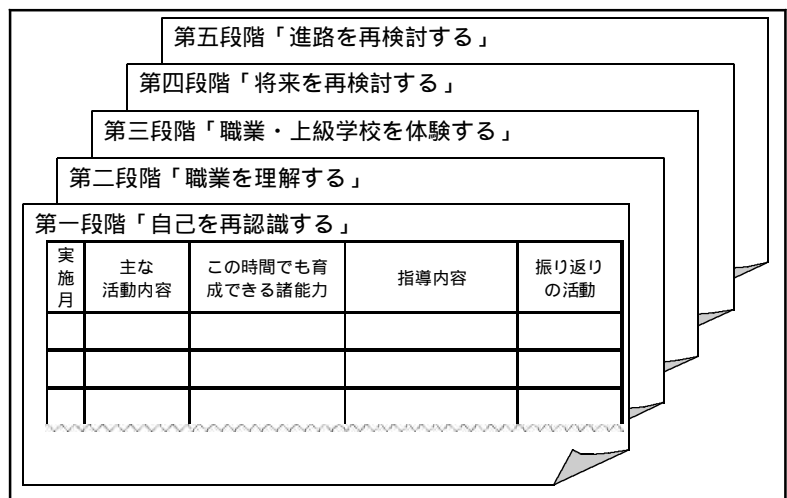
実施学年：第2学年
6月22日 6校時実施

様々な職種を共通理解してもらう

講演会の内容や実際行った内容など具体的に記載する

実施学年・クラス等を明記することにより、教科担任や部活動顧問などへ意識付け

【図8】活動内容をまとめたプリント例

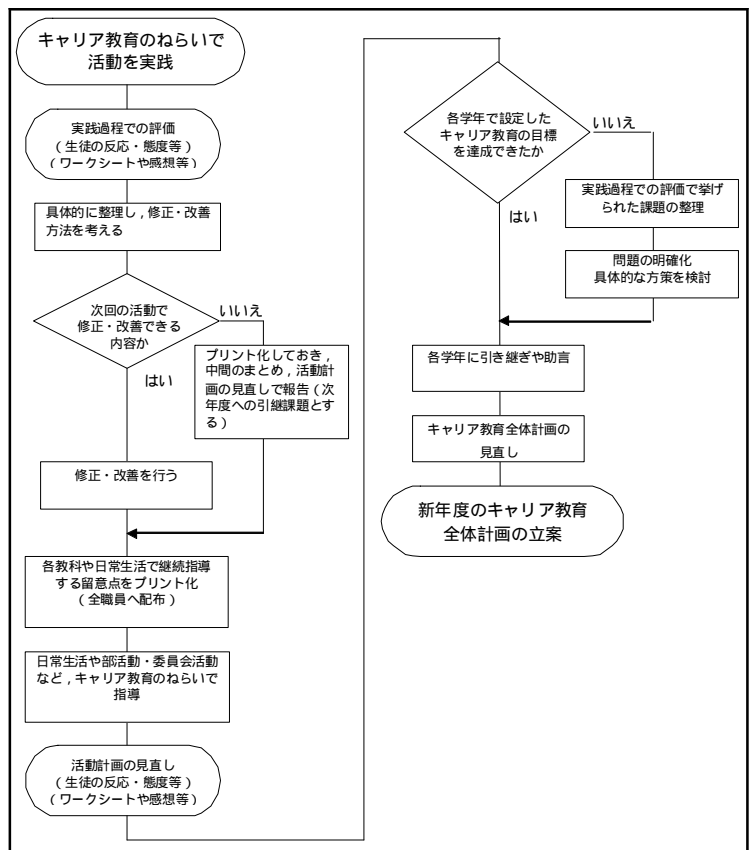


【図9】諸能力の視点を入れた系統的な活動計画

(第2学年を例として)

これにより、PDCAサイクルが可能となり、系統的・持続的なキャリア教育ができる。

以上のことを踏まえ、本研究における指導プランは【図13】のように示す。



【図12】実践過程での評価・活動計画の見直しの考え方

第2学年 キャリア教育目標：将来設計を定め、学力と自己の能力を伸ばそう								
具体的目標		①幅広い進路、職業、生き方の理解 ②企業調査、職場、学校訪問等による自己の価値観、職業観の検証 ③将来の進路を明確にし、将来設計の吟味						
実施月	主な内容 (具体的な内容、必要時間数)	活動の中心となる内容	この活動でも育めてくる能力	主な指導内容	振り返りの活動	活用するワークシート名	実践過程での評価(次回へ活かすことなど)	
7月	専攻力診断テスト(1時間)	総合的な学習の時間 特別活動	【自己理解能力】 【情報収集・探求能力】	事前準備：授業高紙・連絡指導の担当との打ち合わせ ①職業調査のようなテストではなく、自分を客観的に見てくれる検査であることを提示 ②今後の学校生活を送る上で、自分の適性や能力を正しく判断してくれる検査であることと理解させる				
8月	専攻力診断テスト(事後指導：1時間)		【自己理解能力】 【情報収集・探求能力】 【課題解決能力】	事前準備：適性検査の結果(生徒退席時と教師用)ワークシート(必ず印刷して配布しよう) ①各種検査の結果を卒業後の解説書と下に説明(プリント配布でも可)をする ②「適性」と診断された職業をワークシートを使い、調査をする ③結果を基に自分の強み・弱み(得意・不得意)を整理する ④調査方法は、インターネットや図書館、適性検査資料などを活用させる ⑤インターネットの使い方の理解が少ない場合は、時間割変更等を行い、全員が調査できるようにする	8月に行った「社会人講話」より、講師の職業と講義内容を整理しながら指導を行う	①自分の能力・適性を理解し、受け入れさせられたか ②様々な情報を収集・探索し、進路の視野を広げられたか ③各教科・各学習や活動を理解できたか ④職業調査の実践を目標として、問題をどのように解決すればいいかわかったか		
8月	社会(1時間)	総合的な学習の時間 特別活動	この活動でも育めてくる能力 軸となる能力以外でこの活動をと おとして育成できる能力を明記する	事前準備：外部委託の調査を行う(マイクのワークシート) ①講師の職種を主軸に付けられる ②職業等は行わないに ③事前準備で調査	各教科・各授業の授業内容を整理し、1枚の紙にまとめる ①各教科・各授業の授業内容を整理し、1枚の紙にまとめる ②各教科・各授業の授業内容を整理し、1枚の紙にまとめる ③各教科・各授業の授業内容を整理し、1枚の紙にまとめる	①社会人講話 ②社会人講話(事前準備)	①自分の職業・生活・仕事上の適性や強み・弱みを整理する	①自分の職業・生活・仕事上の適性や強み・弱みを整理する ②自分の職業・生活・仕事上の適性や強み・弱みを整理する ③自分の職業・生活・仕事上の適性や強み・弱みを整理する
9月	社会(1時間)			事前準備：事前準備 ①事前に準備したワークシートに記入する ②社会人講話の内容を整理する ③社会人講話の内容を整理する ④社会人講話の内容を整理する	①各教科・各授業の授業内容を整理し、1枚の紙にまとめる ②各教科・各授業の授業内容を整理し、1枚の紙にまとめる ③各教科・各授業の授業内容を整理し、1枚の紙にまとめる ④各教科・各授業の授業内容を整理し、1枚の紙にまとめる	①社会人講話 ②社会人講話(事前準備)	①自分の職業・生活・仕事上の適性や強み・弱みを整理する	①自分の職業・生活・仕事上の適性や強み・弱みを整理する ②自分の職業・生活・仕事上の適性や強み・弱みを整理する ③自分の職業・生活・仕事上の適性や強み・弱みを整理する
9月	キャリア(1時間)			①各教科・各授業の授業内容を整理し、1枚の紙にまとめる ②各教科・各授業の授業内容を整理し、1枚の紙にまとめる ③各教科・各授業の授業内容を整理し、1枚の紙にまとめる ④各教科・各授業の授業内容を整理し、1枚の紙にまとめる	①各教科・各授業の授業内容を整理し、1枚の紙にまとめる ②各教科・各授業の授業内容を整理し、1枚の紙にまとめる ③各教科・各授業の授業内容を整理し、1枚の紙にまとめる ④各教科・各授業の授業内容を整理し、1枚の紙にまとめる	①社会人講話 ②社会人講話(事前準備)	①自分の職業・生活・仕事上の適性や強み・弱みを整理する	①自分の職業・生活・仕事上の適性や強み・弱みを整理する ②自分の職業・生活・仕事上の適性や強み・弱みを整理する ③自分の職業・生活・仕事上の適性や強み・弱みを整理する

【図13】総合的な学習の時間と特別活動を中心とした系統的な指導プラン

3 授業実践及び実践結果の分析と考察

(1) 分析・考察の内容と方法

総合的な学習の時間と特別活動を中心とした系統的な指導プランに関する手だての推進試案に

に基づき、研究協力校の指導プランを作成し、授業実践を行った。

実践をとおして、研究協力校の教師を対象に、「諸能力育成の視点を入れた活動計画の妥当性（系統性の明確化、よかった点、改善点）」、「ワークシート活用の有用性（よかった点、改善点）」、「実践過程での評価」、「その他」に関して評定尺度法と自由記述法併用のアンケートを行い、それに基づいて分析・考察する。その計画は【表3】のとおりである。

【表3】分析・考察の内容と方法

調査項目	対象	調査内容	調査方法	処理・解釈の方法
諸能力育成の視点を入れた活動計画の妥当性	教師	系統性が明確になったか ----- 活動計画のよかった点 ----- 活動計画の改善点	質問紙	実践後に調査を行い、その記述内容から諸能力育成の視点を入れた活動計画の妥当性について、分析・考察する
ワークシート活用の有用性	教師	ワークシートのよかった点 ----- ワークシートの改善点	質問紙	実践後に調査を行い、その記述内容からワークシートの有用性について、効果があったかどうかとその根拠を分析・考察する
実践過程での評価の妥当性	教師	キャリア教育のねらいを意識して活動に取り組めたか ----- 課題が明確になり、次に改善させることができたか	質問紙	実践後に調査を行い、その記述内容から実践過程での評価について、継続的な指導につながるかとその根拠を分析・考察する

(2) 高等学校における系統的なキャリア教育を実践するための指導プラン実践の概要

ア 授業実践の計画

(ア) 対象 岩手県立盛岡商業高等学校 第2学年（男子126名 女子154名 計280名）

(イ) 授業実践期間 平成20年8月22日～11月7日

(ウ) 指導計画 第一段階「自己を再認識する」…………… 1時間

第二段階「職業を理解する」…………… 9時間

第三段階「職業・上級学校を体験する」… 2時間

第四段階「将来を再設計する」…………… 6時間

太枠は、研究者が実践にかかわった時間を表す

【資料1】第一段階「自己を再認識する」の指導計画

時	活動内容	ねらい
1	基礎力診断テストを実施	自己の職業的な能力や学習知識の定着度合いを客観的測定から知る
2	基礎力診断テストの事後指導	自己の能力・適性を理解し、受け入れて伸ばす 今取り組むべき学習や活動を理解する 様々な情報を収集・探索し、自己の進路の視野を広げる 進路希望の実現を目指して、問題をどのように解決すればいいのかを考える

【資料2】第二段階「職業を理解する」の指導計画

時	活動内容	ねらい
1	社会人講話	他者の仕事に対する価値観を聞き、受け入れる
2		必要な情報を選択・活用し、自己の生き方を考える 生活・仕事上の多様な役割や意義を理解する 選択基準となる自分なりの勤労観・職業観をもつ
3	社会人講話の事後指導	学校や社会において、自分が果たすべき役割を自覚する 生きがい・やりがいを見つけ、自己をいかせる進路実現を現実的に考える 自ら課題を設定し、その解決に取り組む方法を考える
4	企業調査・研究 （事前指導）	企業活動や企業組織の基本的な理解を深める
5		職業・産業の動向について、多面的・多角的に情報を集める グループ編成をすることにより、コミュニケーション能力を育成する
6	企業調査・研究 （企業の基本調査）	企業活動や企業組織の基本的な理解を深める
7		職業・産業の動向について、多面的・多角的に情報を集める 自分の果たすべき役割を自覚し、積極的に役割を果たす

8	企業調査・研究 ・ (マナー指導と	企業訪問をととして、社会人としてのマナーやエチケットを身に付ける
9	ロールプレイング)	学んだことを学校生活でも継続して行うことにより、社会人としての心構えを身に付ける

【資料3】第三段階「職業・上級学校を体験する」の指導計画

時	活動内容	ねらい
1 ・ 2	企業調査・研究 ・ (企業訪問)	勤労観・職業観を理解し、勤労・職業に対する理解・認識を深める 生きがい・やりがいがあり、自己をいかせる生き方や進路を、企業訪問をと おし、現実的に考える 社会規範やマナー等の必要性や意義を、体験をととして理解し、習得する



【資料4】第四段階「将来を再設計する」の指導計画


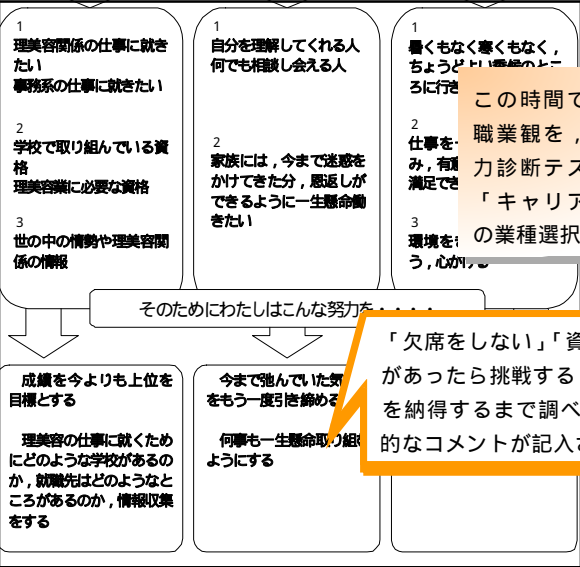
時	活動内容	ねらい
1 ・ 2	企業調査・研究 ・ (企業訪問のまとめ)	勤労観・職業観を理解し、勤労・職業に対する理解・認識を深める 将来設計に基づいて、今取り組むべき学習や活動を理解する 生きがい・やりがいがあり、自己をいかせる生き方や進路を現実的に考える
3	企業調査・研究 (礼状作成)	社会規範やマナー等の必要性や意義を、体験をととして理解し、習得する 自己の思い等を適切に伝え、他者の意志等を的確に理解する
4	企業調査・研究 (個々の振り返りと反省)	理想と現実との葛藤経験等をととし、様々な困難を克服するスキルを身に付 ける 進路希望を実現するための諸条件や課題を理解し、実現可能性について検討 する 将来設計、進路計画の見直し・再検討を行い、その実現に取り組む
5 ・ 6	企業調査・研究 ・ (発表会準備)	調べたことを自分の考えを交え、各種メディアをととして発表・発信する 自己の思いや意見を適切に伝え、他者の意志等を的確に理解する
7 ・ 8	企業調査・研究 ・ (発表会)	調べたことを自分の考えを交え、各種メディアをととして発表・発信する 多様な勤労観・職業観を理解し、勤労・職業に対する理解・認識を深める 将来設計に基づいて、今取り組むべき活動や学習を理解する

イ 授業実践の概要

手だての推進試案に基づいて作成した指導展開案【資料5～6】に従い、授業実践を行った。

【資料5】授業実践の概要

第二段階「職業を理解する」・・・社会人講話(事後指導)		
<本時のねらい> 学校や社会において、自分が果たすべき役割を自覚する 生きがい・やりがいを見つけ、自己をいかせる進路実現を現実的に考える 自ら課題を設定し、その解決に取り組む方法を考える		
段階	活動の流れ	活動の様子 教師の働きかけ 生徒のコメント
導 入	1 本時の活動内容の確認する	 前時にワークシートを用い、社会人講話の内容を振り返り、本時のねらいを説明する
展 開	【自他の理解能力の育成】 2 前時の講話から、「気付いたこと・知ったこと」「行動に移してみたいこと」「確認項目」を振り返りながら、発表する	 「こんな仕事があるとは知らなかった」「自分の就きたかった仕事だったけど、色々な知識が必要なんだなぁと知った」など 生徒同士で、「社会人講話で感じたこと」を聞くことにより、互いを認め合い、違う価値観があることを意識させる

展開	3 ワークシート前半部分を記入する（15分程度）	 <p>「社会人講話」のワークシートと本時のワークシートを活用し、働く意義を感じさせる</p> <p>「他者の話を聞くこと」「自分が感じたこと」を振り返ることによって、新たな気づき生まれる</p>
	【情報収集・探索能力の育成】 4 ワークシート後半部分を記入する（10分程度）	 <p>この時間で気付いた勤労観・職業観を、次回の活動「基礎力診断テスト・事後指導」や「キャリア体験プログラム」の業種選択にいかす</p> <p>「欠席をしない」「資格を取れるチャンスがあったら挑戦する」「興味をもったことを納得するまで調べてみる」など、具体的なコメントが記入された</p>
まとめ	【役割把握・認識能力の育成】 【選択能力の育成】 5 それぞれの項目が、今後の学校生活を送る上で、どういう意味をもっているのかを理解する	

<生徒の記述から>

- ・授業に集中する、家庭学習を行うことにより、成績向上や各種検定試験の合格につながることに気付いた
- ・新聞や専門誌などを活用し、情報収集をしなくてはならないと思った
- ・規則正しい生活をする、目標をもって生きていく、あいさつの大切さや人に対する接し方を学んだ


<ワークシートを活用した指導者の感想> は良かった点 は改善点





後半以降では、自分が取り組む具体的な内容が記入されており、意思決定能力を伸ばすことができた

それぞれの項目で記入した内容は、「努力でできる」「心構え一つでできる」「常に心の中に目標をもてる」という解説を行うと、生徒はもう一度見直し、納得している感じであった

抽象的に記入する生徒が全体の1割程度おり、そのような生徒達を想定し、より記入し易い設問項目を設けることが必要だと思う

【資料6】授業実践の概要

第一段階「自己を再確認する」・・・基礎力診断テスト（事後指導）		
<p><本時のねらい></p> <p>自己の能力・適性を理解し、受け入れて伸ばす 今取り組むべき学習や活動を理解する 様々な情報を収集・探索し、自己の進路の視野を広げる 進路希望の実現を目指して、問題をどのように解決すればいいのかを考える</p>		
段階	活動の流れ	活動の様子 <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">教師の働きかけ</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">生徒のコメント</div> </div>
導入	【役割把握・認識能力の育成】 1 本時の活動内容の確認をする	 <p>返却された結果を基に、本時のねらいを説明する</p>

<p>展開</p>	<p>【自他の理解能力の育成】</p> <p>2 基礎力診断テストの結果を、ワークシートに記入しながら、振り返る</p> <p>3 インターネットを使い、実施業者サイトへアクセスし、適性職業・適性学問の診断チェックを行う</p> <p>4 「社会人講話」のワークシートを振り返り、診断された職業と一致する職業があるか、照らしあわせる</p> <p>5 診断された職業や学校の詳細を調べる</p>	 <p>検査結果は、参考資料とし、自分を理解するための資料であることを確認する</p>  <p>実施業者のインターネットサイトに接続し、適性職業・適性学問の診断チェックをし、自分の知らない職業や上級学校などに気付き、視野を広げる</p>  <p>「社会人講話」で講師として来た方の職業を検索し、どのような仕事内容、技術・知識が必要かを調べる</p>  <p>「こんな職業って、どこにあるんだ？」 「俺が希望している職業があるっ！」 「この技術ってこんな学校で教えているんだあ」 「東北にこんな学校あるの？」 など、生徒の視野が広がった</p> <p>「私が就きたい仕事って色々な資格をもっていないと就けないんだ。じゃあ検定試験、頑張ってみよう！」 「考えていた進路って、簡単に就けないんだ、考え直してみようかな」 など、より現実味を増した職業観を付けることができた</p>
<p>まとめ</p>	<p>【課題解決能力の育成】</p> <p>6 希望している進路と適性診断の結果を比較し、今後の努力すべき内容を見つけ出す</p>	
<p><生徒の声から></p> <ul style="list-style-type: none"> ・今まで知らない職業を知ることができ、自分の考えていた職業とは別に、他の職業にも興味が湧いてきた ・自分が考えていた進路と一致していたので、今後は希望する進路の情報収集を行いたい ・その仕事に就くためには、上級学校に進学しなくてはならないことに気付いた ・どのような仕事に就きたいかはっきり決まっていなかったが、自分の適性を客観的に見ることができたので、自分の将来を考えるきっかけになった <p><ワークシートを活用した指導者の感想> は良かった点 は改善点</p> <p>実施業者のインターネットサイトへ接続する方法が記載されているので、指導者の説明に間にあわなくても、「操作の流れ」を確認することで生徒は迷うことなく、アクセスできた</p> <p>【今回の成績】の記入スペースが狭い感じなのでもう少し余裕を持たればよい</p>		

(3) 実践結果の分析と考察

授業実践をとおして、研究協力校の教師を対象に手だての有効性をみるため、検証計画に基づき調査を行った。また、生徒の意識変容についてワークシートを使って分析し、育成状況をとらえた。

ア 諸能力の育成の視点を入れた活動計画の妥当性について

指導者の意見として、「これまでの活動が単発的で、職業・進路意識の向上につながる活動が一時的なものであったが、系統性をもちつつ、指導を行うことができた」や「これまでは、その時間の進め方など悩みそうな活動もあったが、活動計画の中で指導の流れが明確になっており、分かりやすかった」のような記述が見られた。

また、調査の結果では、キャリア教育の諸能力の視点を取り入れることにより、活動計画が明確になるという回答が45.4%、やや明確になるという回答が45.5%となり、あわせて90%近くが肯定的な回答となった(【図14】)。

これは、キャリア教育のねらいや諸能力の育成を意識することで、指導の内容に厚みが出てきたためと思われる。

以上のことから、諸能力育成の視点を入れた活動計画には、妥当性があると思われる。

しかし、年間をとおしての活動計画が不透明な部分もあり、今後どのような活動を展開するかによって、系統的な活動計画がよりみえてくるものと思われる。

また、長期にわたる活動(インターンシップや企業訪問等)に関しては、活動を行う前に、核となる職員が担任及び指導者と最終目標までを確認して取り組みを行わなければ、系統性がみえにくい点も明らかになった。この点は、今後の改善点として検討していきたい。

イ ワークシート活用の有用性について

調査の結果から、ワークシートを活用することは、有用であったと考えられる(【図15】)。

これは、以前に行った指導を振り返らせることが、容易にできるようになったためと思われる。

また、「長い記述欄が少なく、記入しやすかった」、「生徒に身に付ける能力を評価できる形式であったため、活動の評価もしやすかった」など、指導者や生徒に組みやすい内容であったと思われる。

しかし、生徒が記述したワークシートを担当が、学級経営でどのようにいかしていくか等の参考資料があれば、なお有用性が高まるという意見もあった。

この点は、指導展開案の中に、担任が日常生活で活用できる方法を記載し、より系統的なキャリア教育を行えるような内容に改善していく。

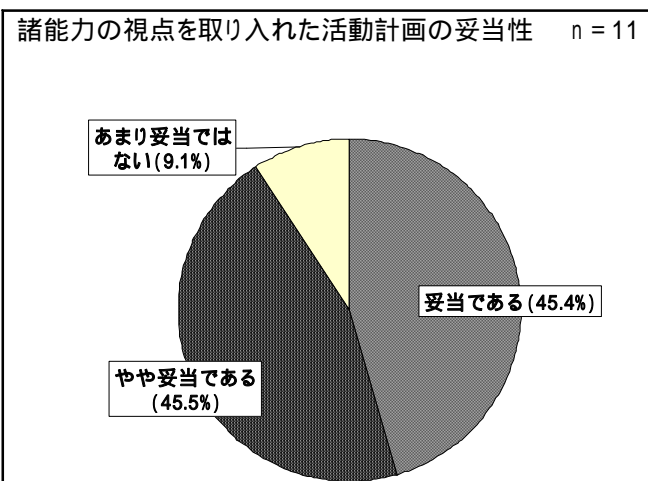
ウ 実践過程での評価について

キャリア教育のねらいを意識して活動に取り組めたという回答が45.4%、やや取り組めたという回答が45.5%となり、肯定的な回答をあわせると90%を超えた(【図16】)。

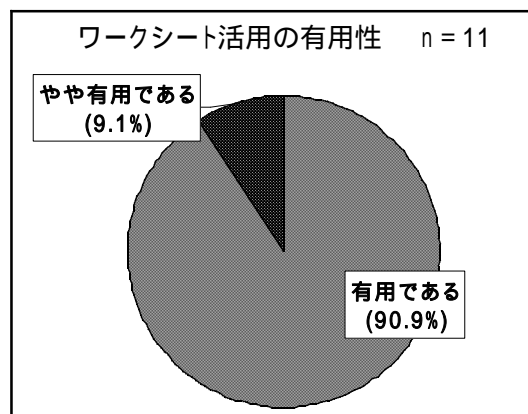
これは、指導展開案や生徒が使用するワークシートにねらいを明記したためと思われる。

また、課題が明確になった場合、改善・修正し、次の活動で改善させることができた(54.5%)、ややできた(36.4%)という肯定的な回答も90%を超えた(19頁【図17】)。

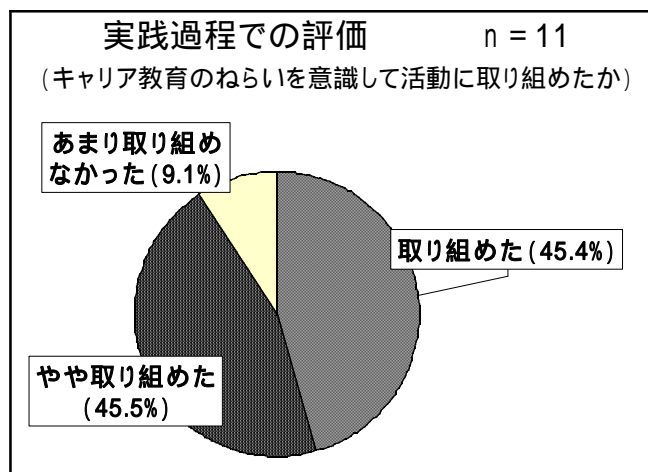
これは、指導者がキャリア教育のねらいを意



【図14】諸能力の視点を取り入れた活動計画の妥当性



【図15】ワークシート活用の有用性



【図16】キャリア教育のねらいを意識して活動に取り組めたか

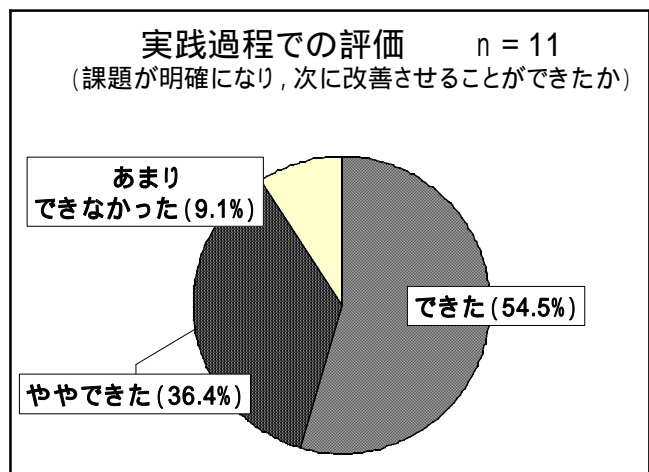
識して活動に取り組みさせることにより、生徒に身に付けさせたい能力が備わってきているかどうかを、判断できるようになったためと考えられる。

以上のことから、実践過程での評価を行うことは、その時間での課題も明確になり、早期の対応もでき、PDCAサイクルにもつながり、系統的・持続的なキャリア教育に資するものと考えられる。

エ 生徒の意識変容について

キャリア教育を意識した活動を行うことによって、生徒個々にも変容が見られた。

【資料7】は、キャリア教育で育成する諸能力にかかわる意識の変容を生徒のワークシートの記述内容から分析し、考察を行ったものである。生徒も様々な活動をとおして、諸能力も伸び、勤労観・職業観が育成されつつあると考えられる。



【図17】課題が明確になり、次に改善させることができたか

【資料7】諸能力の意識の変容状況についての分析と考察

人間関係形成能力にかかわる変容	<ul style="list-style-type: none"> ・色々な人に支えられて、生きてきたことが分かったので、感謝の気持ちを持って生活したい。 ・親に感謝し、家族に心配をかけないようにする。 ・色々な人を知ることができるので、交友関係を広げるよう心がける。 ・学級や部活動の友人以外の交流を多く持つようにして、コミュニケーションを大切にする。 ・困っている人を助けてあげられるような力を身に付け、貢献したい。 ・新しい友人をつくり、相手の気持ちになって考え、人間関係をよくするように心がける。 ・初対面の人とも笑顔で明るく話すようにする。 <p>など、社会人講話の内容より、「コミュニケーションの大切さ」や「友人、家族を大切にする」等の記述が多かった。また、社会人講話の事後指導から、他者を思いやる具体的な記述が多かった。これらの記述は、キャリア教育の基礎基盤となる人間関係の重要性の認識を示すものと考えられる。</p>
情報活用能力にかかわる変容	<ul style="list-style-type: none"> ・会社に貢献するだけが仕事ではないことに気付いた。 ・一つの職業でも、色々な職種から成り立っていることを理解した。また、入社しても、色々な部署に携わり、仕事をしていくことに驚いた。 ・お客様のことを考えて、仕事をする精神に感動した。 ・将来就きたい職種は、どのような仕事を行っているのか、情報収集を行いたい。 ・仕事をするということは、お金を伴う分、責任も大きくなることを知った。 ・嫌々仕事をして辛いだけなので、具体的な目的を見つけて仕事をする、仕事の魅力がみつけれられることを教わった。早速、今日から実践してみたい。 ・学校で学んだことが、結構会社でも使われていることを理解した。資格取得だけでなく、普通の授業もちゃんと受けたい。 <p>など、社会人講話の事後指導や基礎力診断テストの事後指導から、新しい職業を知ることができた。また、社会人講話の講師より、職業観を感じ取ることによって、これまでもっている職業観は狭い範囲であったことに気付いた記述が多い。さらには、「上級学校の調査」や「希望職種の業務調査」を行いたいといった具体的な行動を記述する生徒が多かった。これらの記述は、「働くことの意義」を理解し、「学ぶことの大切さ」に気付き、自己の進路や生き方の選択につながったことを示すものと考えられる。</p>
将来設計能力にかかわる変容	<ul style="list-style-type: none"> ・夢を持つことが大切であると思った。 ・自分や地域のために何か手伝えることを考え、参加したいと思う。 ・上司や先生に「言われたらすぐ行動に移す」ことを、実行できるように、毎日の生活を送りたい。 ・失敗を恐れずに行動に移してみたい。そこから感じたり、学んだりするものがあると思う。 ・普通の授業をちゃんと取り組むことにより、資格取得にもつながり、進路選択の幅が広がること

<p>る変容</p>	<p>わかった。 ・自分が考えていた進路目標を達成するため、何が必要なのが分かった。 など、社会人講話では、「夢や目標をもつ」記述が多かったが、事後指導を行うことにより、目標を達成するための具体的な手だてとして、「学力向上」と「資格取得」を挙げる生徒がほとんどであった。 これらの記述は、将来の夢や希望を掲げながら、現実を前向きに見つめ直し、自分が果たすべき役割の認識を示すものと考えられる。</p>
<p>意思決定能力にかかわる変容</p>	<p>・自分が希望していた職種には、上級学校に進学後、仕事に必要な知識・資格を取得してから就けることが分かった。そのためには、今学校で学んでいる学習をしっかりと取り組まなくてはいけないことに気付いた。 ・適性検査の結果から、自分が考えていた進路とは別な職種に適性があることに気付いた。以前から興味をもっていた職種なので、これから情報収集をしたり、色々な講話を聞いたりしながら、真剣に考えていきたい。 ・社会人講話では、自分の就きたい職種の人だった。講師の先生の話聞き、イメージと違う職業であった。次に予定している企業調査・研究では、就きたい職種を調査したいが、基礎力診断テストで適職と診断された職種を調査してみたい。 など、これまでのキャリア教育にかかわる活動を行った結果、自己の進路希望と適性のギャップに気付く記述が多い。企業調査・研究の活動では、これまでのワークシートを振り返ることにより、自己の適性と新たに身に付いた職業観から、これまで希望していた職種とは違う職種を選択する生徒が多くなった。 これらの記述は、これまでの選択肢の中から、比較検討を行い、主体的に判断できる能力が育ちつつあることを示すものと考えられる。</p>

4 高等学校における系統的なキャリア教育を実践するための指導プランの作成に関する研究のまとめ

これまで、手だての推進試案に基づく授業実践を行い、実践結果の分析と考察をとおして、その有効性を検討した。その結果から、成果と課題についてまとめる。

(1) 成果

- ア 系統的なキャリア教育を実践するための指導プランは、活動内容毎に身に付けさせたい諸能力を明らかにし、担任もしくは指導者がキャリア教育を意識しながら活動に取り組みせることに有効であった。また、これまで単発的に行われてきた活動を系統的に行うことができたため、生徒の諸能力も伸び、勤労観・職業観を育成することに有効であった。
- イ 身に付けさせたい諸能力を意識したワークシートを作成することにより、生徒も活動のねらいを理解しながら、取り組むことができた。
- ウ 職員間の共通認識を図る「キャリア教育推進だより」を発行するための留意点や活用方法などを明らかにすることができた。
- エ 実践過程での評価を行うことにより、活動内容の問題点等が明らかになり、素早い対応が可能となった。

(2) 課題

- ア キャリア教育をコーディネートする職員と指導者が、活動毎に綿密な打ち合わせを行い、キャリア教育のねらいやその時間に身に付けさせたい諸能力を確認しながら、指導を行うことが必要である。そのために共通認識を図る「キャリア教育推進だより」は、定期的に発行する必要がある。
- イ ポートフォリオされたワークシートを、担任が学級経営で効果的に使用するための活用のポイントを示す必要がある。
- ウ ワークシートは、実践をとおして、さらなる修正と改善を加えていくことが必要である。

研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

本研究は、高等学校における総合的な学習の時間と特別活動を中心とした系統的なキャリア教育を実践するために役立てようとするものである。そのため、これまで学校で行っていた総合的な学習の時間と特別活動の活動内容を、キャリア教育の視点に照らしあわせ、活動計画を整理することにより、系統性が明確になった。また、生徒も様々な活動をとおして、諸能力が伸び、勤労観・職業観が育成されつつあることが確認された。

なお、成果として次のことを得ることができた。

(1) 高等学校における系統的なキャリア教育を実践するための指導プランの作成に関する基本構想の立案

基本構想の立案において、系統的にキャリア教育を行うための五つの段階を明らかにし、「諸能力育成の視点を取り入れた活動計画」「必要に応じたワークシート」「実践過程での評価や活動計画の見直し」等を明らかにすることができた。

(2) キャリア教育の発達に基づく指導プラン・ワークシートの作成

手だての推進試案を基に、活動内容に即したワークシートを作成し、系統的な指導が行えるよう、指導展開案を作成することができた。

(3) 授業実践及び実践結果の分析と考察

活動計画に育成する能力と振り返りの活動を明記することによって、指導者がキャリア教育で育成したい諸能力を意識して、系統的に指導できることが明らかになった。

また、ワークシートを活用することにより、生徒に過去の活動内容と感じたことなどを振り返らせ、新たな勤労観・職業観をもたせることができた。

(4) 高等学校における系統的なキャリア教育を実践するための指導プランの作成に関する研究のまとめ

実践結果の分析と考察から明らかになったことをまとめ、指導プランを作成することによって、高等学校キャリア教育において、「勤労観」「職業観」を伸ばすことができるという見通しをもつことができた。

2 今後の課題

本研究においては、第二学年の実践にとどまっていることから、今後、他学年についても実践をとおして指導プランの有効性を更に明らかにする必要がある。

今後の課題としたい。

[おわりに]

この研究を進めるに当たり、ご協力いただきました研究協力校の先生方、生徒の皆さんに心から御礼を申し上げます。

【引用文献】

- 内田千代子（2007），『大学における休・退学，留年学生に関する調査 第28報』，茨城大学保健管理センター，pp.21-22
- 川崎友嗣（2007），「キャリア教育とキャリア発達」，『進路指導』，日本進路指導協会，p.43
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2002），『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進に関する調査研究報告書』，p.36
- 宮下和己（2006），「各校におけるキャリア教育への取組とその評価」，『指導と評価5月号』，日本図書文化協会，pp.17-20
- 文部科学省（2006），『小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引き』，pp.3-6，pp.9-10，p.43，p.56
- 文部科学省（2007），『高等学校学習指導要領』，p.8，p.385
- 山崎保（2006），『キャリア教育が高校を変える』，学事出版，p.22

【参考文献】

- 愛知県総合教育センター（2007），「キャリア教育推進に関する調査研究」，『愛知県総合教育センター研究紀要 第97集』
- 岩手県（2008），「第2部岩手の暮らし」，『いわて統計白書』
- 梶輝行（2004），「キャリア教育カリキュラムに関する理論的研究」，『研究集録 第23集』，神奈川県立総合教育センター
- 厚生労働省（2007），「高等学校新規学校卒業者の就職離職状況調査結果」，『労働経済白書』
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2002），『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進に関する調査研究報告書』
- 文部科学省（2004），『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』
- 前川岳詩（2006），「将来を見つめ自らの生き方を考える力を育てる小学校キャリア教育の推進に関する研究」，『岩手県総合教育センター研究紀要』，岩手県総合教育センター
- 渡辺美枝子（2007），「いま，求められるキャリア教育とは」，『教育研究岩手』，岩手県立総合教育センター